慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シルヴィア・プラス : 軽薄と絶望
Sub Title	Sylvia Plath: Flippancy and despair
Author	広本, 勝也(Hiromoto, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.61 (2012. 10) ,p.49- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20121031-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シルヴィア・プラス
——軽薄と絶望

広　本　勝　也

序

シルヴィア・プラス（Sylvia Plath, 1932–63）の死後出版された伝記は，彼女の死に伴う哀感や恐怖を掻き立て，厳しいイギリスの環境で，壊れやすく傷つきやすいアメリカ人女性という詩人像を描き出した。ヨーロッパ的な腐敗とアメリカ的な無垢という，ヘンリー・ジェームズ的な構図のなかで，不実な夫や同情心の乏しい義理の姉に向かい合う犠牲者として，世間はヒューズの敵，プラスの味方になった。[1]

プラスは著述を通じて，人間としての苛酷な条件や苦しみとの闘いを続けるが，それが結局，彼女を破滅させ自死に追い込む。「幻視と悪夢の結合」と評されるその作品は，大胆なイメジャリと独創的なリズムを駆使し，芸術的に抑制された緊張感に満ちている。「人はすべてを把握する知的な頭脳によって，どんなに凄まじいことでも，経験を統御し操作することができるはずだ」と彼女は言い，その主題は極端な状態の精神に関与している。[2]

本稿では，従来の批評を概観した後，プラスの生涯について論述し，7編の主要作品を取り上げてその特質を明らかにすることにしたい。

Ⅰ．従来の批評

プラスの文学の受容については，Jo Jill の *The Cambridge Introduction to Sylvia Plath* の “Reception” に手際よく整理され，①伝記，②告白，③神話，④フェミニズム，⑤心理的な分析，⑥歴史と政治，⑦新しい方向――などに分けて解説されており，それを参照すると以下のように略述できる。

（1）伝記批評――プラスの伝記については，真実が部分的にしか語られておらず，どの研究も不十分なので，それが次の研究を刺激するという。十分な調査を尽くした最初の伝記として，Edward Butscher が，「真の自我と虚偽の自我」という二分法のもとに，プラスの美学と心理的な幸福感の連関性を追求し，プラスにおける人生と著述の双方に認められる矛盾の幾つかを体系化するための方法として，“bitch goddess” という呼称を採用している（1976）。次いで，Linda Wagner-Martin が 20 世紀の文学的背景のなかで，ジェンダーや文化的な脈絡を探り，プラスをフェミニストの原型と評価する（1987）。ワグナー - マーティンの書物の出版の少し前から，詩人 Anne Stevenson が Plath Estate の承諾と助言のもとに，新たな観点から伝記を書き始めたが，ヒューズ関係者（特にヒューズの姉 Olwyn Hughes）との妥協と調整があったとされ，記述内容に関する客観的な中立性に問題があって，プラスは「わがままで，利己的で，冷たい」などと評されている（1989）。一方，Paul Alexander は，プラスの母親からの聞き取りという直接的な資料を駆使したが，テッド・ヒューズなどからの協力を得られなかったために，調査に限界があったという（1991）。また，終末（自殺）を生の始まりと見る Ronald Hayman によれば，プラスは「犠牲者」である。さらに Jacqueline Rose（1991）は，プラスの著述との関連でその生涯を追う。そしてプラスの伝記のなかに，先行研究についての解説を盛り込んだ Janet Malcolm の *The Silent Woman*（1994）は，一種のメタ伝記批評であり，既刊のプラスの伝記に関する鳥瞰図となる。[3]

（2）告白体の詩――プラスの詩について，作者の生活をほぼそのまま直接反映した，自叙伝的な投影と見る批評がある。しかし，彼女の詩を「その背後にある真実」への導水管とみなすのは，注意深い考察や操作による詩学を見落とすことになる。作者は無表情であり，関連性のなさ，言語の滑りやすさ，物質の持つ非情性などに関心があり，安易にカタルシスとなる言語を拒むことを意図した。詩的言語を，現実の直接的な表明や解釈に還元することはできないのである。

（3）神話的な要素――プラスの詩を告白体の詩から区別しているものは，神話的な要素である，と Judith Kroll はいう。クロルはモチーフ，シンボル，主題，暗喩に注目し，プラスの各作品の間に見られる様式や関連を識別した。例えばプラスの「月と詩の女神」は，月の女神についてのロバート・グレイヴズの分析に基づいており，「蜂」に関係する詩には，サー・ジェイムズ・フレイザーの『金枝篇』における再生の神話などの影響が認められる。

（4）フェミニズムによる批評――当時の有能な女性は，時代のイデオロギーが割り当てる女の役割と自分の抱く抱負との葛藤の間で苦しんだ。不満を持ちながらも，家庭の主婦としての役割に甘んじるという多くの例に倣うことなく，プラスが女性としての意識・経験・言語を前面に押し出し，抵抗・怒り・欲求についての女性的な表現を試みた，とフェミニズム批評は評価する。Luce Irigaray などによれば，「女性の欲望は，男たちの欲望と同じ言語を語るわけではない」という。

（5）心理分析――初期の批評家のなかで，例えば David Holbrook は，作品よりも作者を分析することに比重があった。また，Edward Butscher は，プラスの「神経症的な激情」「父親への固執」「内なる怒り」「分裂した自我」「自己愛」「潜在的な精神不安」などについて診断しているが，女嫌いの解釈と結びついて，限られた心理分析による素描となっている。一方，Alexander Rose の関心は，プラスを読み解くことではなく，矛盾や分裂を含む表現内容にあり，テクストの実体を解明しようとする。また，

Christina Britzolakis によれば，プラスの作中，女性のイメージのなかで最も頻繁に現われるのは，娼婦，演技者，機械的な女などであり，「心理分析」がプラスを尋問するとき，プラスが「心理分析」を尋問するという複雑な構造を持つ。

そのほか，「歴史・政治的観点からの批評」「新しい傾向」についても，Jo Gill は述べているが，主な流れは以上のようなものである。[4]

Ⅱ．生　涯

(1)

1932 年 10 月 27 日，シルヴィア・プラスは米国マサチューセッツ州ボストンのロビンソン・メモリアル病院に生れた。46 歳の父オットー（Otto Plath, 1885–1940）は，ドイツ語を母語とし，ポーランドから合衆国に移住したボストン大学生物学教授で，昆虫学，特にマルハナバチについての研究を専門とした。25 歳の母オーリーリア（旧姓名 Aurelia Schober, 1906–94）は，オーストリア系移民の第一世代として生まれたアメリカ人だった。2 年半後，二人の間に，2 番目の子どもウォーレンが生まれた。この頃，一家はボストン郊外のジャメイカ・プレインに住んでいた。子どもの頃のウォーレンは病気がちで，シルヴィアは，しばしばマサチューセッツ沿岸ポイント・シャーリーに住む母方の祖父母の家に預けられることがあった。ウォーレンの誕生後，しばらくしてオットーは体調を崩し始めた。彼は自分の糖尿病をどういうわけか肺癌と自己診断し，4 年間医学的な治療を拒んだ。このため糖尿病の壊疽が悪化し，片足が切断された後，1940 年 11 月，肺の塞栓症のために 55 歳で死亡した。彼の娘が 8 歳の誕生日を迎えて，間もなくのことだった。彼女は父が，一種の自殺的な行為によって自分を意図的に見捨てたのだ，と感じた。シルヴィアはその後の自分の精神的な苦しみの要因を，父の死によって説明し過ぎるところがある。が，オットーの死がしばらくの間，娘の認識力を撹乱し，想像力を支配したことは事実であって，彼女の成人後の作品にもその影響が窺われる。[5]

1942 年オーリーリアたちは，ボストン西方の郊外ウェルズリーの小さな白い家に移った。金銭的な収入が，彼女にとって火急の課題だった。夫の死後，彼女は二人の子ども――シルヴィアとウォーレンを育てるために，高校でドイツ語とスペイン語を教える臨時教員になるかたわら，家庭教師も引き受けた。その後，ボストン大学秘書養成コースで教職の仕事が見つかり，家計を支えることが楽になった。

シルヴィアの学業成績は，マーシャル・リヴィングストン初等中等学校，ガマリエル・ブラッドフォード高等学校を通じて，常に「優」の成績を収めた。「シルヴィアは『優マイナス』の成績を受け取ると，どうして『優』がもらえないのですか，と尋ねに来るタイプの生徒だった，と担任教員の一人は回顧している」。[6] 勉強面で強みを発揮しただけでなく，彼女は創造的な文芸にも才能の萌芽を示していた。9 歳からの子供時代の詩は，1940 年代初期に『ボストン・ヘラルド』紙（1941 年 8 月 10 日）やアンドーヴァーの学校新聞『フィリップス校の人々』などに掲載された。[7] 高等学校では，学校新聞『ブラッドフォード』の共同編集者の一人だった。18 歳の時，短編小説「そして夏はもう来ない」（“And Summer Will Not Come Again”）が『セブンティーン』誌（1950 年 8 月）に発表された。高校から大学にかけて，シルヴィアの夏休みは，ウエートレス，ベビーシッター，農作業などさまざまなアルバイトやボーイフレンドたちとのデートに費やされた。中でも特筆されるのは，小説『ベル・ジャー』（*The Bell Jar,* 1963）のバディ・ウィラードのモデル Dick Norton やアマースト大学英文科の学生 Gordon Lameyer との交友である。ディックはウェルズリー以来の友人で，イェール大学に通った後，ハーヴァード大学医学部の学生になった。「デートしても純潔を守ること，よく学びよく遊ぶこと」は，当時の若い女性に課せられたアメリカのイデオロギーだった。シルヴィアは時代の思想を深く吸収し，「成功か死か」が，彼女にとってこのイデオロギーの還元される修辞的な選択となった。[8]「フェミニズムの第二の波として知られるようになる思潮の興隆直前，女たちは聡明でありながら魅力

的，自信家でありながら従順，高度の成功者でありながら，自分たちの最高の達成が結婚・子供・家庭にあるという認識を持っている，という矛盾する相容れない要求に直面していた」。[9]

1950 年 9 月，シルヴィアは，マサチューセッツ州ノーサンプトンのスミス女子大学（Smith College）に奨学金を得て入学し，英文学を専攻した。そこでは，ヴラジミル・ナボコフがアレクサンドル・プーシキンについて講義し，アーネスト・シモンズが「ドストエフスキーの小説と西洋のリアリズム」について話した。10 月 19 日の講義で，ナボコフが「ロシアの著述家にとって国外脱出（エグザイル）はほとんど自然的な状態で，それを『魂の落ち着きのなさ』，自分の環境に所属していない感性と定義できる」と語ったとき，創作に携わろうとする学生たちの共感を得ただけでなく，シルヴィアは自分の個人的な疎外感に公的な表現が与えられた，という思いがしたに違いない。[10] また，小説家エリザベス・ボウエンは「大西洋の両側における小説」について講じた。さらに，翌年 1 月 6 日，下院議員ジョン・F・ケネディが政治学のクラスで講演し，夕方の談話会まで残るということがあった。[11] 同大学はシルヴィアが期待していた以上に知性を刺激し，様々な文化活動のプログラムを提供してくれた。このような教育環境のなかで，学生たちを特徴づけたのは，「歯を食いしばってでも，成功のために力を尽くすという固い決意」だった。[12] 奨学金の学生としてプレシャーを感じていた彼女はきわめて勤勉で，少なくとも「全教科平均『良』」（“B” average）以上の成績を得るための努力をした。[13] シルヴィアは要求される以上の勉強をし，授業や礼拝に定期的に出席して教員たちを感心させた。同時に，たえず執筆し編集に携わるという作業を継続させ，『スミス・レヴュー』（*Smith Review*）誌の編集員の一人となった。しかし，典型的なスミス女子大の学生たちは，有能であるだけでなく，女性としての伝統的な役割における人格の円満さが求められた。すなわち，女子学生たちは専門職の男性と結婚し，家庭を持って，自分の料理したご馳走（グルメ・ミール）を食べながら，リルケについての会話ができるという，模範的な妻になる準備の過程にあ

るとみなされた。そのため週末，デートの相手がいない女子学生は，肩身の狭い思いをしなければならず，「裏門からこっそり寮に帰る」のだった。[14] しかも，男なら誰でもよいというわけではなく，アイヴィー・リーグのどれかに所属する学生か，家柄や学歴で申し分のない相手でなければならなかった。[15] 幸いシルヴィアには，前述の友人ディック・ノートンがいた。

2 年生になると，シルヴィアは 19–20 世紀の文学，政治学入門，ライティング，視覚表現，宗教入門，体操などの科目を履修した。ディックとの交際は続いていたが，ほかの男たちとデートすることもあった。[16] しかし依然として著述が，彼女の心を占める最も主要な関心事だった。父親の遺した赤表紙の類義語辞典（セソーラス）を頼りに，彼女は想像の壁を造り，現実世界を締め出すために絶えずことばを紡ぎ出した。[17] お陰でその努力が実り，1952 年 8 月，シルヴィアは『マドモアゼル』誌の懸賞小説で，「ミントン家での日曜日」（“Sunday at the Mintons”）が 1 等になり，五百ドルの賞金を獲得した。

1953 年 4 月 10 日（もしくは 3 月 8 日？），春学期の訪問教授 W. H. オーデンの詩の朗読会が Sage Hall であり，シルヴィアはこれに出席し，乾いた抑制された読み方，気取りのない態度，皺の多い親切そうな顔などに引き付けられた。[18] だが，彼女を魅了したのがその作家的な風貌ではなく，彼の詩だったことはいうまでもなく，彼女は文学上の模範とすべき英雄を見出して，「わたしは自分の神を見出した」と宣言した。[19] 6 月，20 歳の時，『マドモアゼル』誌の大学特集号の 20 人の客員編集員の一人に選ばれ，ニューヨークに滞在した。約 1 カ月のインターンシップを経験したあと，疲れきって帰宅した。この時，ハーヴァード大学での夏期講習で，アイルランド人作家フランク・オコナーの指導する創作のための「短編小説講座」を申し込んでいたが，彼女は受講が認められなかったことを知った。このため自信喪失に陥り，精神科へ通院するようになった。

8 月 24 日，地下室で大量の睡眠薬を飲み，自殺を図ったが，3 日後発

見され，マサチューセッツ州立総合病院に運ばれ精神科病棟に入院した。後述の作品「甦る女」（“Lady Lazarus”）の中で，彼女は「10 年に 1 度の割合で，それを（＝自殺未遂）をやってしまう」と言っている。ことば通りに理解すれば，10 歳の時にも自殺を企てたことになるが，これを裏付ける医学的な根拠となる記録は見当たらない。シルヴィアによれば，「10 歳の時，水泳中，溺れそうになったことがある」と言い，これを誇張もしくは虚構化したとも考えられる。

その後，シルヴィアはボストン郊外ベルモントのマクリーン精神病院に移り，ルース・ボイシャー医師の治療を受けた。同医師はソラジン投与などの従来の治療後，改善が見られないので，1953 年 12 月，電気ショック療法を試みた。その結果，彼女は後期の授業に出られるほどの回復を示し，1954 年 2 月，女子大に復学した。卒業論文に取り組むかたわら，フロム，ユング，ニーチェ，マルクス，ヘンリー・ジェイムズ，シャーウッド・アンダーソン，ナサニエル・ホーソンなどの著書を読んだ。[20]

7 月，シルヴィアは，Nancy Hunter など，大学の他の女子学生 3 人と一緒に，マサチューセッツ州ケンブリッジのアパートに間借りし，ハーヴァード大学の夏期講習に通った。彼女は二つのコースに登録した。「ドイツの小説」，および「19 世紀の小説」だった。皮肉にも後者の担当者は，前年，創作講座の受講を認めなかったフランク・オコナーだった。このクラスでは，数多くの小説を読むことが課された。オースティン『エマ』『自負と偏見』，スタンダール『パルムの僧院』，バルザック『ウージェニー・グランデ』，ディケンズ『荒涼館』，トロロプ『バーセット最後の年代記』『フィニアス・フィン』，フロベール『ボヴァリー夫人』，トルストイ『コサック』，ツルゲーネフ『その前夜』，トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』などだった。[21]

ある時，ナンシーとシルヴィアは，ワイドナー図書館の階段近くで，“Edwin” と名乗る痩せ形の背の高い男と出会った。彼は二人をコーヒー・ショップに誘った。「セント・ルイスの某大学の生物学教授で，夏の間，

ハーヴァードで調査（リサーチ）をしている」などと言い，自分の仕事についてとめどなく語った。[22] 26 歳のこの男は，禿頭で眼鏡を掛けていて，醜男でおまけに妻帯者だったが，知性のきらめきがあり，才能の冴えを感じさせた。彼は最初，ナンシーに接近したが，彼女は下心を見抜き悪党だと思った。「人当たりの良い善良そうな様子にもかかわらず，どう言っていいのか分からないけれど，陰険（シニスター）なところがあった」。[23] ナンシーが，教授がどのように口説くための緊張感（サスペンス）を高めるのか，相手の出方を待つという半ば気のない態度を取ると，彼はシルヴィアの方に誘いをかけた。自伝的な小説『ベル・ジャー』で Irwin と呼ばれるこの男と，彼女はひょんでもなくデートするようになり，性器裂傷による出血を経験させられることになる。

いささか信じ難いような呆れた話だが，彼女はディック・ノートンの後の新しい交際相手ゴードン・レーマイヤーに恋文を書き，エドウィンとの関係を保ちながら，既婚者のハーヴァード大学の教授とも親しくなる素振りを見せた。が，ヴァージニアに出掛けていたゴードンが戻ってくると，数カ月間のプラトニック・ラブを経て，8 月 14 日，愛欲を成就させた。1954 年 8 月下旬から 9 月上旬まで，二人は親密さを保ち続けたが，この後，再びそのような関係になることはなかった。[24]

秋にシルヴァイアは女子大に戻り，再び時間に追われる生活が始まった。シェイクスピア，ドイツ語中級，卒業論文などのクラスのほかに，英文科の教授で小説家 Alfred Kazin 担当の創作教室に出席することになった。[25] 授業に加えて，イギリス留学を実現するための応募書類の準備があり，さまざまな雑誌への作品の投稿や文科系優等学生友愛会（フラターニティ）「アルファ・ファイ・カッパ・プサイ」（Alpha Phi Kappa Psi）の課外活動があって，[26] ゴードンと一緒に過ごす暇もなかった。「週末会えないか」と彼が言ってきたとき，彼女は，すでにイギリス出身の Richard Sasoon という，イェール大学の学生に心を寄せ始めていた。[27]

1955 年 1 月，彼女はドストエフスキーの小説についての論文「魔法の鏡――ドストエフスキーの二つの作品における二重人格の研究」（“The

Magic Mirror: A Study of the Double in Two of Dostoevsky's Novels”）を提出した。5 月，フルブライト奨学金を得て，イギリスへの留学が決まった後，6 月，「最高優等」（“summa cum laude”）で大学を卒業した。女子大での彼女の年月は，商業誌の短編小説や詩の部門での幾つかの賞の受賞，すぐれた学業成績，学生雑誌の編集，教員や学生仲間からの高い評価などに特徴づけられ，当時の関係者も，シルヴィアの成功の頂点に輝く「甘美と光」――仮面の肯定的な側面を証言する。[28] しかし，Butscher によれば，彼女は絶えず世間の称賛を求める欲求と，どんな犠牲を払っても社会に自己の印しを残したいという，強迫的な観念に引き裂かれ駆り立てられていた。仮面の背後にあるのは，激しい競争心，父親への妄執，ナルシシズムである。彼女の文学の根底には，「世界は本質的にすべて悪意のある過程だ，という不可知論的な確信があり，彼女の日常生活を支配する，明るい一般的な平凡さや中流階級の順応性と奇妙な対照を示している」。[29]

1955 年 9 月 13 日，弟ウォーレンが，シルヴィアをニューヨークへ車で送ってくれた。翌日，二人は市内をぶらぶらして，ブルーミングデイルで買物したり，ロックフェラー・センターを見学したりした。翌日，彼女は弟と別れのキッスを交わした後，「クイーン・エリザベス II 世号」に乗船し，ニューヨークを発った。かくて彼女が辿ってきた人生航路（ジャーニー・オブ・ライフ）の途上で，デッキからマンハッタン島が遠去かっていくのを眺めた時，眼前には洋々たる大西洋の母なる海原が拡がっていた。[30]

（2）

3 日かけて船は，フランス北西部シェルブール経由で，イングランド南部，ハンプシャー州サウザンプトン湾に到着した。そこから奨学生たちは，鉄道でロンドンのウォータールー駅に運ばれた後，バスでリージェンツ・パークのベッドフォード・コレッジに着き，そこが仮の宿泊所となった。9 月 24 日，シルヴィアは他の 3 人のフルブライト女子学生たちと YWCA4 階の部屋に移り，やがて始まるケンブリッジ大学第 1 学期（秋学

期)，ミカエルマス・タームまでそこに留まった。

10 月 1 日，同大学ニューナム・コレッジに入り，バートン・ロード 4 番地のウィットステッド寮に住むことになった。この建物はやや荒廃の兆しを見せかけている，だだっ広い木造家屋で，樹木の点在する広い庭があった。彼女の個室は屋根裏で窓辺に椅子があり，そこでものを書いたり本を読んだりして，庭の木々の天辺を見下ろすことができた。[31] 部屋には，コインを入れて利用できるガスの暖炉があったが，部屋を暖めるためには毎回 1 シリング硬貨が必要だった。炉床にはガス・コンロがあり，紅茶やコーヒーを飲むためのお湯を沸かすことができた。彼女は，生活上のチューター Irene Morris，寮母，10 名の同居者の学生たちと知り合いになり，10 月初旬には新しい環境に慣れて落ち着くことができた。[32]

イギリスでのシルヴィアの目的は二つだった。一つは広範囲に勉強し，過度な専門化を避けて最高の教育を受けること，そしてもう一つは将来の夫となる男性――“Mr Right” を見つけるための「真実の恋（トゥルー・ラブ）」を経験することだった。[33] 勉強計画については，学習指導兼アカデミック・チューターの Kathleen Burton が，2 年間のシルヴィアの守備範囲となる計画の立案を手伝ってくれた。2 年目の終わりとなる 6 月まで，大学の制度としての試験はない。2 年間を通じて，試験は最終試験 1 回だけである。しかし，その時まで，ケンブリッジでは “supervision” と呼ばれる，チューター（“supervisor”）との個人指導があり，評価の記録が残される。シルヴィアの場合，週に 1 回はバートン，もう 1 回は他の教員 Dorothea Krook という 2 人のチューターに会って，その都度，自分の書いたエッセーについて議論することが求められた。ドクター・クルックは，ヘンリー・ジェイムズやモラリスト――特にプラトンの専門家だった。グランチェスター・メドウズ 111 番地のクルック先生の家に出向き，自分のエッセーに基づいて，若く魅力的な教師と論じるのが，シルヴィアには大きな楽しみだった。クルック先生が学問的な経歴で成功していながら気取りがなく，感じがよくて女性的なやさしさを持っていることが，彼女には嬉しかった。[34]

個人指導とは別に，ファカルティの建物のある教室では，英文科学生のための講義やセミナーがあるが，単位制ではないので，これらの授業に出席するかどうかは，学生の自主的な判断に任される。シルヴィアは履修案内と時間割を見て，午前中のクラスの中から週 11 コマを選んで，現代イギリス小説の David Daiches，モラリスト作家論の Basil Willey，批評論の F. R. Leavis などのクラスに出席することにした。彼女は学部学生の短い黒ガウンを着て，アメリカから輸送してもらった自転車に乗り，ニューナムの学寮から授業のある建物へペダルを漕いで通った。[35]

ケンブリッジでは学問的な研究だけではなく，学生たちのクラブや同好会を中心とする社交生活（ソーシャル・ライフ）がある。スミス女子大に較べると，勉強のための時間割が緩やかだったので，シルヴィアは「アマチア演劇クラブ」（The Amateur Dramatic Club）に関与し，シェイクスピアの喜劇『お気に召すまま』のロザリンド，テネシー・ウイリアムズの幻想的な劇『カミノ・リアル』のカミール，ベン・ジョンソンの喜劇『バーソロミュー・フェア』の金切り声を挙げる娼婦アリスの端役などを演じた。[36] また，週刊の学生新聞『Varsity』紙に記事を寄せただけでなく，初夏のファッションを紹介する特集のモデルにもなった。[37]

シルヴィアにとって転機が訪れたのは，精神的に不安定になる兆候を感じた彼女が，1956 年 2 月 25 日，Dr. Davy という精神科医で受診した後，シルヴァー・ストリートのパブ「錨亭」（The Anchor）の近くで売られていた学生たちの新しい文芸誌『セント・ボトルフ評論』（*St. Botlph's Review*）を 1 部買い求めた時のことだった。その中に載せられていた Ted Hughes の詩が，彼女の注意を引いた。夜の刊行祝いのパーティに彼女が出席したことがきっかけとなって，二人は互いに強く惹かれるようになった。[38] シルヴィアは完璧な男性として亡くなった父親に似た人物――自分が愛し，かつ知的に尊敬できる相手，自分を凌駕することがなくとも，ほぼ同等の才能を持つ文芸仲間を求めていた。テッドは，このような彼女の願望に適う人物だった。[39] こうして数カ月後の 6 月 16 日，彼らはロンド

ンの St. George the Martyr 教会で挙式するに到った。

結婚後，二人の住まいとなったケンブリッジの 2 階建て長屋式のフラットは，家賃週 4 ポンド，浴室は上階の夫婦と共有だった。「（フラットの）あらゆる物が古くて薄汚い。何世紀もの煤に，何から何まで汚れている」とシルヴィアは嘆いた。彼女は自転車に乗ってマーケット・スクウェアに買い物にいき，火がついたり消えたりする，頼りないガス・コンロで調理した。また，テッド・ヒューズの詩をタイプし，エージェント兼ビジネス・マネジャーとして，雑誌社に夫の詩や小説を売り込むことに努めた。[40]「シルヴィアの実務性，疲れを知らぬ精力，文学上の知識などのために，彼女がテッドを必要とする以上に，テッドが彼女を必要としたのである」。[41]

1957 年 5 月 27 日から 31 日にかけて，学士号を得るための優等卒業試験があり，[42] 6 月初旬，名前と成績が大学の評議員会館（Senate House）に貼り出された。成績は優（I），良の 1（II-1），良の 2（II-2），可（III）に分かれ，それ以下の成績については「優等学位」ではなく，「普通学位」が授与される。シルヴィアは「II-1」（セカンド，ファースト），つまり「良の 1」の成績で，優等学位が与えられた。[43]「優」（ファースト）ではなくて，シルヴィアは多少期待はずれだった。指導教官のクルックによれば，シルヴィアは学業面ですぐれた成果を示していたが，学者であるよりもむしろ詩人であることが分かった。彼女は卓越した実作者になるための努力を惜しまず，自分自身の著述に役立つことを学ぶ，という観点から勉学に励んだのだった。[44]

（3）

イギリスでの学生生活，詩人テッド・ヒューズとの結婚，そしてその破綻を通じて，彼女は作家としての真の自我を確立したが，それは彼女がアメリカ的な同一性を脱ぎ捨てることを求めた。彼女が鋭い知性を発揮するためには，アイゼンハワー的な郊外型の生活で保護された網から逃れるこ

とが必要だった。[45] 彼女は冴えないケンブリッジ駅のプラットホームに，新品の白と金のサムソナイトの旅行鞄で現われたという。[46]「彼女は小奇麗で，清潔で，可愛い系の少女っぽい服装で，人の目が思わずその衣服ではなく，それを着ている人物に行ってしまう類の装いをしていた。髪の毛はいつも肩まで垂れていたが，きちんとブラッシングされ櫛梳られ，頭頂部で幅広のヘアバンドで押さえられていた」。1940 年代・50 年代の石鹸会社の広告に出てくるような，典型的なアメリカの金髪（プラチナ・ブロンド）の少女，それが初期の彼女の身体的特徴だった。[47] この時期のシルヴィアについて，小説家 A. S. バイアット（1936–　）は陳述している。「彼女は話し掛けるのが難しかった。上品で意図的に外向的，金髪で紅い唇，驚くほど活気のある，健康的なアメリカ娘という積極人間のイメージだった」。[48]

だが，1962 年のクリスマス・イーヴ，彼女の死の 2 カ月前に会った詩人 Alfred Alvarez によると，彼女はもはや人工的に漂白したブロンドではなく，生まれつきの茶髪に戻っており，際立った清潔さを感じさせなかったという。[49]

1963 年 2 月 11 日，月曜日，シルヴィアのかかりつけの医師ジョン・ホーダーに派遣された看護婦マイラ・モリスが，約束の午前 9 時，ロンドン，フィッツロイ・ロード 23 番地上階に住むシルヴィアのフラットを訪ねた。呼び鈴を押したが応答がなく，建物の周りを回ると，開いた窓に子どもが二人泣いているのが見えた。近くで作業していた建築業者チャールズ・ラングリッジに頼んで，フラットのドアをこじ開けて中に入ると，ガスの栓が全開された部屋の中で，タイルの床の上にシルヴィアの手足がだらんと伸びていた。頭はオーヴンの奥深く突っ込んだ状態で，頬の下には折り畳んだタオルが敷かれていた。[50]

検死の後，自殺が確認された。テッド・ヒューズがヨークシャーまで遺体に付き添い，ヘプトンストールのヒースの荒野にある，家族の墓地に埋葬することになった。2 月 16 日の午後，地元の教会で簡単な葬儀が執り行われ，テッドの両親や，アメリカから飛行機で駆けつけた，シルヴィア

の弟ウォーレンとその妻マーガレットなどが参列した。母親オーリーリアは娘の死にあまりにも強い衝撃を受け，イギリスまで旅行する気力を失っていた。葬儀の後，参列者たちは墓地に集ったが，辺りは薄い雪の層に覆われていた。後日，墓石には “Sylvia Plath Hughes 1932–1963” という氏名と生没年，そして「激しい炎の中でも，黄金の蓮は植えられる」（“Even amidst fierce flames the golden lotus can be planted.”）という，テッドの選んだ『バガヴァドギータ』からの銘が刻まれた。[51]

Ⅲ．作　品

1.「詩よ，ジャガイモよ」
（“Poems, Potatoes,” 1958）

1957 年 9 月，シルヴィアは母校スミス女子大学英文科の講師となったが，翌年 1 月に退職した。そして彼女は，マサチューセッツ州立総合病院の診療室で事務的な仕事をしながら，ボストン大学でロバート・ローウェルの創作セミナーを聴講した。この頃に書かれた「詩よ，ジャガイモよ」は Wallace Stevens の詩に倣って，[52] 詩の限界についての考察を試みている。書きとめられたことばは意味を誘発するが，同時にそれは観念的な拘束状態を産み出す。それはことばの外にあるあいまいさを取り除き，押さえつけることになる。ことばは精確な定義や意識的な形態を与えるが，他方，ヴィジョンは自由であり，注意が拡散した状態で形態を持たない。「ことばとして定着された世界」と「ことばに支配されない内なる〈魔の海域〉」との間にある境界を越えたい，と作者は思う。[53]「じゃがいも」とは作品化された詩行であり，その鈍い茶色の塊りを越えて，表現し得なかった想像上の領域が繊細な作者の意識にいつまでもつきまとう，というのである。

ことばは定義しつつ　口輪をはめる　引かれた線は
あいまいな仲間を押し出して栄える　それらは殺人的だ

構築物のなかで　書かれなかった詩行にできるのは

ただ亡霊のように　つきまとうことだけだ
じゃがいもや石のように　がっしりしていて　意識がなく
ことばや詩行は存続する　1インチでも与えられれば

それらが粗雑だというわけではないが（しばしば　後で考えれば
もっと繊細な　安定したものに　表現を
変えたいと思うのだけれど）絶えずわたしを欺く

多かれ少なかれ　いつも不満が残る
詩にもならず　絵にもならず　じゃがいもは
こぶの多い茶色の塊りを束ねる　すこぶる
高級なページの上に　鈍い石もまた

2.「占星家たち」
（“Magi,” 1960）

長女フリーダが生まれたとき，テッド・ヒューズは娘がベッドの上に浮游する宿命的な星に支配されている，と感じた。シルヴィアは，このような不吉な予感に反発した。[54] この詩には知性を弄ぶ「男性的なもの」への批判，理論に自己陶酔している男たちへの批評が窺われる。

退屈な天使たちのように　抽象観念がうろつく
卵形の顔の天上的な無表情に彫り込む
鼻や目ほど　俗悪なものはない

天使たちの白さは　洗濯物や
雪やチョークやその他のものに無関係　彼らが

ほんものだというのね　善であり真実だと——

彼らが　湯ざましの水のように
健康的で浄らかだとしても
掛け算表のように可愛げがない
赤ん坊は　そんなことにはお構いなく　希薄な空気に
向かって笑っています

この世に生を受けて六カ月　この子は
綿入れのハンモックのように　元気に這い這いしています
この子には　ベビー・ベッドにつきまとう

悪についての重苦しい観念など　お腹痛
ほどの意味も持たないのです
そして愛は　母乳を持つ母であり　理論ではない
迷信家たちは　間違った星占いを信じている——これら紙人形の信者
　　たち

彼らは　知性の灯りを持つプラトンのような
小児用寝台を欲しがっている
彼らは自分たちの学識で　プラトンの心を驚かせればよいのです
こんな連中とつき合っていて　女が輝いた試しがあるかしら

3.「志願者」
(“The Applicant,” 1962)

「志願者」(“The Applicant”) は，男によって女に押しつけられるジェンダーとしての役割を主題にし，結婚生活のあり方についての問いを投げ掛ける。作品の主人公は社会的に不具化されたセールスマンであり，性医学

の療法士（セラピスト）を装う詐欺師でもある。彼はまず読者に向かって，自分と「同じ人種」であるかどうかについて尋ねる。このセールスマンの考えでは，身体的に無疵の人間は「堕落していない人間」であり，「堕落していない人間に，どうして私たちが寛大になれるというのか。私たちは君の欲しいと思うものを，君にはあげないよ」と彼は言う。一般的には，肉体的に障害のない人が，結婚相手として選ばれることが多い。ところが，詩人のペルソナである彼は，何らかの欠損のある人間を結婚候補者の前提条件としており，身体的な欠如・障害が，社会的に受け入れられるか，排除されるかについての問題を提起する。

第 1 連で彼は，非人間化され「欠損」に特徴づけられた者たちに結婚相手を提供する。義眼，義歯，松葉杖など，人工的なものに取り替えられた部分を持っている者，あるいは手術跡によって何かが失われたことを示す者たちは皆，欠落の意識を共有する同じ人種である。[55] 彼は結婚相手を見つける親切な斡旋者を装いながら，実はまがいものをつかませるのである。

この作品が下敷きにしている文学的伝統の一つは，ミルトンの『失楽園』（VIII, 379–451）である。裸のアダムが，神に対して自分にふさわしい伴侶を求めたところ，神は「なぜそんな必要があるのか」と冗談めかして尋ねるが，その願いを聞き入れ，「よき助け手」としてのイーヴを連れてくる。

シルヴィアの「志願者」では，裸の男に「黒くて堅い背広」，つまり慣習的な「夫の役割」を果たすための，安全性の保証が差し出される。一般的に背広は，社会的地位を示す一種の制服であり，エリート人間の地位，職業，所属意識などを表わす。一方，伴侶となるのは，グラビア誌のモデルのような女である。「生きた人形」の彼女は料理も裁縫もできて，話も上手。「あなた，この似姿（イメージ）と結婚しませんか」とセールスマンは，男に売り込む。

男性が女性に対して抱いている理想像は何か。このセールスマンによれ

ば，①男は性的な欲望を満足させたい，②女性に身の回りの世話をさせ，家事をやってもらいたい，③夫は妻が，同僚や知人たちと社交的な会話ができることを望む――などである。ミルトンでは，「イメージ」(image) は「神の似姿」であるが，シルヴィアの詩では，それがパロディ化され，抽象的で個性のない「性的な画像」になっている。この作品の終わりの方で「可愛子ちゃん」は代名詞の “it” で示され，①ポルノ画像，②性的な人形，③夫によって非人間化される妻――などを含意している。そして，このような女性像と結婚することにより，紙婚式（1 年目），銀婚式（25 年目），金婚式（50 年目）を迎えることが語られている。

まず最初に　君は私たちと同種の人間かね？
ガラスの義眼　入れ歯　松葉杖
副木や　鉤の義手
ゴム製の乳房とか　ゴム製の股

何かが失われたことを示す縫合跡とか？
ないって？　ないのかい？　それでは
どうして君に　いい物をあげられるかね
泣かなくてもいいよ
手を開いてごらん
からっぽ？　からっぽかい？　さあ　ここに手がある

君の手を満たして　ティー・カップを持ってきたり
やさしく頭痛を癒したり
君が言うことを何でもしてくれる――
君はこれと結婚するかい？……

……失礼ながら　君の頭はからっぽだ

それにはお誂えのものがある
可愛子ちゃん　押入れから出ておいで
さあ　この娘をどう思うかね
最初は裸の紙のようだけど

25 年もすれば銀色に
50 年で金色になる
どこからどこまで　生きた人形だ
裁縫も　お料理もできる
気の利いた話もできる

なんでもやるよ　悪いところは何もなし
君に欠けた穴があれば　人形が湿布になってくれる
君に眼が一つあれば　人形がイメージで満たしてくれる
さあ　たぶん君には　これが最後の手段だ
これと結婚しますか　結ばれますか　結婚しますか

4.「お父さん」
(“Daddy,” writ. 1962)

既述のように，シルヴィアの父は蜂の飼育に熱心な大学教授だったが，糖尿病からの合併症で壊疽を患い片足が切断された後，さらに病状が悪化した。8 歳のシルヴィアは，看病しながら父が死んでいくのを見守らなければならなかった。作者は自分の過去を祓い清めたいと思っており，この詩はそのための儀式である。

第 1 連で，詩人は子どものような女性の声で，亡くなった父に話し掛ける。まず彼女は 30 年間，父の「黒い靴」(“black shoe”) のなかの足のように，我慢しなければならなかったという。「黒い靴」は直接的には，マサチューセッツ州東部「コッド岬」(“Cape Cod”) の入江を指している。

詩人はそこに拡がる美しい海洋を愛でながら，次第に恨みを募らせていく。この岬に象徴される最初のものは，自分を圧迫する父であるが，詩の進行過程で夫になり，さらに「拷問を好む」凶悪なファシストを連想させ，一般化された男性を意味することになる。

第 2–3 連は父に対する嘲りであり，自分が生きるために，父の亡霊を落ち着かせなければならない。第 4 連は，自分がどれほど虐げられてきたかについて，過去の歴史を導入する。第 5–10 連は，父のために被った苦悶や恐怖をナチの拷問にたとえている。詩人はユダヤ人のように，有刺鉄線のなかに捕えられ，機関車でアウシュビッツへ駆り立てられていく（“An engine, an engine / Chuffing me off like a Jew.”）。だが，「女は誰でもファシストを讃える」（“Every woman adores a Fascist,”）と言い，憎しみのことばの中に父への深い愛情を隠している。

第 11–12 連は語り手のイメージの中で，父親と夫が重なる。父親の摸像（モデル），あるいは類似の存在としての夫であり，「腹黒い男」（“the black man”）と呼ばれる。第 12–13 連では，語り手の自殺の試みに言及されている。第 14 連は，抑圧的な男性や夫への被虐的な愛の表白となっている。「黒い電話は根元で引きちぎられた」（“The black telephone’s off at the root,”）とは，作者が暗い記憶を断ち切ったことである。だが，「ついにやり遂げた」（“I am finally through.”）と言いながら，シルヴィア（のペルソナ）自身も激しい消耗感に襲われる。

第 15 連で，「私は一人の男を殺したのなら，二人の男を殺したことになる」（“If I’ve killed one man, I’ve killed two——”）と言い，自分の心が父親的な男性——「吸血鬼」（“vampire”）を抹殺した，と告白する。第 16 連は，浄化のための儀式の終わりである。村人たちによって「呪いの杭棒」（“a stake”）が心臓に打ち込まれる。過去の記憶は拭い去られ，語り手の詩人は父親への複合観念から脱却したことになるが，力を使い果たしてしまう（“Daddy, daddy, you bastard, I’m through.”）。

この詩について，ユダヤ人の痛みが作者の意図のもとに利用されている

とか，個人的な心的現象を残虐な歴史と同一視するのは「不適切」であり「自己尊大化」だ，と非難されることがある。しかし，これはシルヴィアが敢えて挑発を意図したことなのである。この詩の中で彼女が自己固有の体験としているものを，彼女のライバルであるアッシア・ウェヴィル――夫テッド・ヒューズの破滅的な恋の相手も部分的に経験しているはずであり，女性一般の共感を誘うところがある。

5.「ニックとロウソク立て」
(“Nick and the Candlestick,” 1962)

14 連のこの作品のなかで，不眠症の詩人には，夜が悪意を持つ夢のように思えたのであろう。あるいは彼女は深夜に目が覚め，超現実的な悪夢にさいなまれたのかもしれない。第 1 連で，彼女は「洞窟の坑夫」であり（“I am a miner.”），第 2 連で，「大地の子宮」（“The earthen womb”）である夜の中を掘り進んでいく。そこは母親の胎内，死の墓であり，父親のペニスが入っている。父親の愛情を回復することが不可能なために，大地の子宮は涙を流すほど退屈している。

次の連で，「黒い蝙蝠のような空気」は，暗い赤を暗示する「すももの皮」，すなわち「死の皮膚」のように詩人にまとわりつく［“They（i.e. Black bat airs）weld me like plums.］そして，夜の洞窟の闇は捕食性・肉食性を持っており，「イモリでさえも白い」（“Even the newts are white,”）という。「白」（“white”）には曖昧さがなく，神聖・敬虔の白さであり，制度的な宗教への作者の警戒心を示し，「白」という憎しみの「清らかさ」，「純粋の憎悪」を通じて，彼女自身の憎しみを投影している（第4連）。「聖なる従軍牧師たち」（“holy Joes”）「魚のような氷の板」（“And the fish, the fish―― / Christ! They are panes of ice,” 第 5 連），「刃のある万力」（“A vice of knives,” 第 6 連）など，身の凍るようなイメージの後，「ピラニア」に象徴される吸血鬼のような宗教（あるいは男性という攻撃的な者）が，「生きた足指からわたしの血を吸い取る」（“A piranha / Religion, drinking / Its first

communion out of live toes.”）という。ここでは既成宗教へのシルヴィアの敵意が窺われ，足の親指から始まった，父親の病気にまつわる偏執が持続しており，彼女の意識の中でその親指はペニスと置き換えられる。

以上が精神障害の幻覚に基づく詩の前半である。後半は第 7 連 2–3 行目に始まり，詩人は「ごくりと喉を鳴らして」正気を取り戻し，ロウソクの黄色は活気づく。「胎児のお前が，『氷と死』の世界にどうしてやって来たのかしら」（“O love, how did you get here?” 第 8 連）。ここで「胎児」（“embryo”）は，①まだ生まれていない自分，②リビドー的な自我，③自分の胎児――などの複合的な心象となっている。ここから愛を中心とするポジティヴな世界が開ける。「お前が目覚める（世の）痛みは，お前のものではない」（“The pain / You wake to is not yours.”）と言い，再生と希望の焦点として，これから生れるニックがキリストと重なり，「新しい星」（“the stars”）と目される（第 9–11 連）。詩はニックが転回軸となって，愛に満たされたヴィクトリア朝的な，堅実な家庭のイメージを提示する。最終行では「馬小屋」（“the barn”）の語を用いて，キリストが生まれた場所を連想させ，第 9 連からの心性を持続させている。

6.「甦る女」
（“Lady Lazarus,” 1962）

自殺の約 4 カ月前に書かれたこの詩の背景は，「ヨハネによる福音書」（『新約聖書』）のなかのエピソードである。イスラエル東部ベタニヤの住民ラザロ（Lazarus）が，重病で亡くなった。死後 4 日経っていたが，イエスは彼を甦らせた。シルヴィアは 10 年に 1 回自殺を試みるが（“I have done it again. / One year in every ten / I manage it――”），奇跡的に甦ると言い，異常な出来事（＝ショー）で読者（＝観客）を引き寄せる（第 1 連）。シルヴィアは覗き見的な趣味を持つ読者と対決する姿勢を取り，痛烈な口調で語り掛ける。語り手である詩人は，舞台で演技する犠牲者となる。

第 2 連に入り，「お父さん」（“Daddy”）の手法と同じように，作者はナ

チスの残虐な行為と個人的な経験を合成する。作者がナチの犠牲者と自分を同一視することに対して，疑問を抱く読者もいるであろう。歴史の中の重大な出来事を私的に用いることが適切かどうか，批判的な見方もあるが，詩の主題への関心を誘う要因になっている（第 2–3 連）。

一種の生きた奇跡　わたしの皮膚は
ナチの作った電灯笠のように輝き
わたしの右足は

文鎮
わたしの顔はのっぺらぼう　織目の細かい
ユダヤ人製の敷布（リンネル）

第 4 連で，作者はさらにグロテスクなイメージで，「わたしがこわいの？」（“Do I terrify?——”）と言い，観客を驚かせるだけでなく，挑み脅かすような声を響かせる。

これで三回目
なんてたわいのない話
十年ごとに　自分を消滅させるなんて

百万のカメラのフラッシュを焚いて
ピーナツを噛む群衆が
押し寄せてきて

彼らの前で　わたしの手が　足が
包帯からほどかれるのを見守る……

彼女の「大掛かりなストリップ・ショー」(“The big strip tease”) は苦悩に満ちた内的探求だが，そこには観客を楽しませる余裕がある（第 10 連)。BBC の朗読では，“I may be skin and bone, / may be Japanese.” となっていたが，作者の死後，出版に際して後者は削除された。「この詩行は，単に押韻を付け加えるものであり，原爆の最初の犠牲者の日本人への不必要な言及だ」という，A. アルヴァレズの助言をシルヴィアは受け入れていた。[56] 第 12–14 連で，作者はいままでの自殺未遂についての過去を振り返り，自分が被害者だったと訴えている。第 14–16 連では，彼女を生き返らせるための「呼び掛け」(“call”) があり，それは現実世界という舞台へ彼女を引きずり戻す。彼女は読者に挑みつつ，芝居がかりの「真昼の生還」(“the theatrical / Comeback in broad day”) を果たす（第 17–18 連)。第 23–24 連で，彼女は，滅びることのない核となる自我を保持しながら，社会的，文学的，性的な意味での自分の価値を確認する。

最後はこう締めくくられている。「灰の中から / わたしは赤毛のまま立ち上がり / 空気のように男たちを食べてやる」(“Out of the ash / I rise with my red hair / and I eat men like air.”)。「虚偽の生という灰から炎のように甦って，虚偽の男性的な成像（イマーゴ）を燃やし尽くしてしまう」と David Holbrook は言っている。[57] 語り手は不死鳥のように生まれ変わり，男たちとの戦いを続けて，男たちに復讐する。男性を厳しく咎めるが，男たちへの対決を定式化することで自己責任を拒み，軽薄さと絶望が同居している。このような人格の二重性は，作者がスミス女子大で取り組んだ研究課題であるが，彼女自身の属性としても認められる。

7.「縁」
(“Edge,” 1963)

最後の作品と考えられる「縁」(“Edge”) は，作者の死のほぼ 1 週間前に執筆された。約 4 カ月前に書き上げた「冬を越す」(“Wintering”) の草稿の裏面に記されていた。「冬を越す」では，母性的な産み出す力のある

身体が冬と闘いながら，自己を開花する過程を辿るのとは対照的に，「縁」は作者が自分の肉体を閉じていく。[58] この詩は自殺を栄光化するものとして批判されたが，文学作品として十分に客観化され自律している。この詩から読み取れるのは，シルヴィアが自殺を世間に立ち向かうための武器として使っていること，また自殺への推進力が創造力の源泉にもなっていて，作者が引き返す道を失うほどに，自分の苦境を芸術のために悪化させた，ということである。[59]

この作品の中では，語り手の「剥き出しの足」のそばに「白い蛇」のように寄り添う「死んだ子どもたち」は，「自分たちが遠くまで旅してきたが，もう旅はこれで終わりだ」と告げている（Her bare / Feet seem to be saying: / We have come so far, it is over. / Each dead child coiled, a white serpent,）。

シルヴィアは当初，子どもたちを殺害することを考えたあと，その計画を変えたのかもしれないとの憶測もある。[60] 小さな白い蛇のように，子どもたちは，空っぽのミルク入れのそばで体を丸め，咲き終わった薔薇の花弁のように，彼女の体にたたみ込まれている。

Each dead child coiled, a white serpent,
One at each little

Pitcher of milk, now empty.
She has folded

Them back into her body as petals
Of a rose close when the garden

Stiffens . . .

詩人の体は死を選ぶことによって，「達成感の微笑みを浮かべ」（“the smile of accomplishment”）ている。死はギリシャの彫像のように，古典的な完成をもたらす。「子どもたち」は，死を免れたとしても，保護を失くして孤児となる可能性がある。詩人は自分が唯一の保護者であることを示すために，[61] 自分の幼い子どもたち――それはまた，いままでの著作品のメタファーでもある――を身体の中に包み込む。「縁」を飛び越えて死の世界に入るのは容易であり，庭で夜を迎える薔薇が花びらを閉じるのと同じく自然過程の一部に過ぎない。

だが，氷のように冷たい月は暗闇のなかで，彼女の死を嘆くことなく，傍観者として眺めているだけだ。「月は官能的な生きた女なら，反映したいとは思わない類の女性的（フェミニン）な存在である。しかし，常に皮肉っぽいプラスは，女性の不合理な側面についても，言及に値するものとして語らざるを得ない。プラスがほかのところで，『粋な黒』と呼んでいるものに包まれた曖昧（アンビヴァレント）な月は，すべての女性の持つ世界，予測されない距離と矛盾に満ちた世界の，ぞっとするような性格を示している」。[62]

結　語

シルヴィアの文学については，彼女の詩が私的な生活の告白ではなく，超時間的な神話体系の中に統合され，人間存在についての普遍的な構造を表現しているのかどうか――という点が問題になる。Judith Kroll によれば，「告白詩人の場合，私生活が芸術に入っていくが，シルヴィアはその逆だ」という。Lowell や Sexton ではヴィジョンの不完全性が，彼らの詩に力強さを与えているが，シルヴィアには，神話的な全体性のヴィジョンがある。個人的な事象からの芸術的な離脱と神話的な統合がある。彼女の詩の構造には，「ギリシャ悲劇の運命の必然性を想わせる神話的なドラマ」がある。[63]

一方，Irving Howe は語っている。「彼女の詩は，感情の造型性や声の抑揚を欠いている。その最良の詩でも，始まりや終わりの原則がほとんど

なく断片的である。一つの長い詩というよりも，詩人の陥ったヒステリーのために，終わりのない感情を迸らせる詩のようだ」。[64]

これに対して，「抒情詩は，一般的な人間存在というものを回避する」と Helen Vendler は反論している。詩が提示するのは，人間・事物・経験の捉え難い希薄な要素である。シルヴィアにヴィジョンの価値や性格についての一貫した声明がないとしても，それは詩人の任務を超えている。生きるための積極的なヴィジョンを，彼女に求めるのは不当である。結局，道徳的な観点で，父による認知と父からの愛情を求める彼女の探求は不十分だった。彼女は，死後の世界にもこの世にもヴィジョンを持っていなかった。[65] ヴェンドラーは，批評家 Calvin Bedient のことばを引用している。「彼女の作品における，死のなかで完全性を達成するという運命は，理性による理解を超えており，読者には不可解である。古典のような意志の悲劇と異なり，シルヴィアの場合，致命的に傷つきやすい感覚や弱さの悲劇である」。[66] ビーディエントやヴェンドラーは，クロルとの違いを示しつつ，神話的な不完全性の中に，シルヴィア特有の文学的な意義を見出し，「彼女の作品に潜む悲劇的なストーリー性は，ギリシャ悲劇の運命とは異質である」という。また，Butscher は，「冬のイメージや不毛な停止状態の図像への作者の好みが続いており，彼女の芸術の源泉がどこにあるかを窺わせる」と言い，基底に潜むナルシシズム，成功への飽くなき執念，自己パロディなどを指摘している。[67]

自我と他者，個人と社会という対立関係を考えるならば，常にシルヴィアは自己意識に執着しており，その意味でロマン派の延長上にある。だが，ロマン派詩人たちは抑圧された弱者を代弁し，社会への反逆，権力機構への抗議，社会の中での疎外，文明に対する自然の賛美などによって読者の共感を得た。これに対して，彼女は被抑圧者との連帯感を表明するのではなく，むしろ加害者や暴力的な存在と自己を同一視し，読者の共感を求めるのではなく，読者を挑発することを意図する。

社会に受け入れられないロマン派詩人たちは，敗北者意識を持ちながら

も，社会への呪詛を芸術として作品化し，それによって輝き繁栄し注目された。他方，シルヴィアの詩では，人間社会への嫌悪によって活路を見出すのではなく，出口のない閉塞状況での病める自己を表現することに終始する。死への過程を辿る以外にはない存在，そのような自我とは何者なのかについて，自他に分からせることが彼女の主要な課題である。ユダヤ人に対する迫害や広島の被爆者などへの言及を通して，彼女は歴史的・社会的な事実を個人的な話題と結びつけて語るが，それは彼女が，人種問題や核兵器の引き起こす悲惨さに関心があるからではなく，自己定義のために歴史的な事件を利用し，終局的な焦点である詩人，すなわち自我へ読者の注意を向けさせるためなのである。

彼女は自己中心的であり，ナルシシスティックであるが，ロマン派詩人と異なって，社会的に疎外された存在としての自己を肯定するわけではない。名門女子大学の優等生だった彼女は，例外的な存在やアウトサイダーや脱落者に対しては否定的である。シルヴィアは，社会の中の「普通の人」の平凡な幸福に肯定的な価値を見出しているが，現在の生活環境の中では充足していない。そこで，「失われた世界」という認識に基づき，自然とは何か，他者とは何か，自分は内なる自我に対してどう関わるのか——などについて，彼女は問い掛ける。時には無防備な幼児のような声で語られるこれらの問いは，社会との関係で悩む彼女が異常なのではなく，これらについて思索し表出する行為がきわめて正常であることを明らかにしている。

「シルヴィアの詩の背後にあるのは，とてつもなく非妥協的な性質である。……そして，原始時代の絵に見られるような風景，燃えながら輝く楽園のヴィジョンの上に，奇妙な詩の女神が浮游している。この楽園は不気味に脅威的で，死そのものに照明をあてている」とテッド・ヒューズはいう。[68] シルヴィアの詩に存在する光景として「楽園」が喚起されるならば，それはミルトン『失楽園』第 4 巻のエデン（ll. 205）とはまったく異質な反〈楽園〉（Anti-Paradise）である。[69] それは，シルヴィアの自己防衛が産

み出した終着点であり，傷ついた身体と精神（サイキ）によって創り出された閉ざされた世界である。概してシルヴィアの詩作品には，『失楽園』に見られるような人類の希望がなく，その対極にある悲劇的な緊迫感が印されている。彼女は常に “serious” な努力家であり，死後，作家としてカルト的な地位を得たほどの “high achiever” であるが，その反面，「試みることがどんな役に立つのか。何らかの行為をする，そのことにどんな意味があるのか。やってみたところで，人生が良い方に変わることなど決してない」と彼女の無意識のアニムスが語り掛ける。[70] 彼女の作品は，「奇妙な受動性，あらゆる感覚の麻痺，ある種の虚しさの感覚に通じるような深い不安」[71] を蔵しながら，人間の生存形態についてのきわめて率直な表白となっており，自我意識の自然的な表明であるということができる。

注

1. Janet Malcolm, *The Silent Woman: Sylvia Plath & Ted Hughes* (New York: Vintage Books, 1993; 1994), pp. 56–57.
2. Marion Wynnw-Davies, ed. *Bloomsbury Guide to English Literature* (London: Bloomsbury Publishing Ltd, 1989), pp. 804–5.
3. Jo Gill, *The Cambridge Introduction to Sylvia Plath* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2008), pp. 112–15.
4. ibid., pp. 115–28.
5. Helen Vendler, *Coming of Age as a Poet: Milton, Keats, Eliot, Plath* (Cambridge, MA: Harvard Univ. Press, 2003; 2004), p. 117.
6. Gill, p. 4.
7. loc.cit.
8. Quoting from Gill, p. 5.
9. Gill, p. 5.
10. Edward Butscher, *Sylvia Plath: Method and Madness* (1976; New York: Pocket Books, 1977), p. 46.
11. loc.cit.
12. Gill, 4.
13. Connie Ann Kirk, *Sylvia Plath: A Biography* (Amherst, New York: Prometheus Books, 2009), p. 61.

14. Butscher, pp. 49–50.
15. ibid., p. 50.
16. Kirk, p. 63.
17. Butscher, p. 75.
18. ibid., p. 102.
19. Paul Alexander, *Rough Magic: A Biography of Sylvia Plath* (1991; Cambridge, MA: Da Capo Press, 1999), p. 105; Kirk, p. 67.
20. Gill, pp. 6–7.
21. Kirk, p. 82.
22. Kirk, p. 83; Alexander, p. 145.
    Hayman, p. 79，および Anne Stevenson, *Bitter Fame: A Life of Sylvia Plath* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1989), p. 53 では，“Edwin” ではなく “Irwin” となっている。
23. Butscher, p. 161.
24. Alexander, p. 147.
25. Kirk, p. 85.
26. Alexander, p. 149.
27. Kirk, p. 85.
28. Edward Butscher, “In Search of Sylvia: An Introduction,” *Sylvia Plath: The Woman & the Work*, ed. Edward Butscher (1977; New York: Dodd, Mead & Company, 1985), p. 10.
29. ibid., p. 11.
30. Alexander, p. 165.
31. ibid., p. 167.
32. Linda W. Wagner-Martin, *Sylvia Plath: A Biography* (New York: St. Martin’s Press, 1987), p. 121 では 12 名 ; Kirk, p. 92, および Alexander, p. 167 では 10 名)。
33. Wagner-Martin, pp. 123–24.
34. ibid., p. 126.
35. ibid., p. 127; Stevenson, p. 63.
36. Wagner-Martin, p. 127; Kirk, p. 92.
37. Wagner-Martin, p. 124.
38. ibid., pp. 130–34.
39. Butscher, “An Introduction,” p. 12.
40. Wagner-Martin, p. 139–40.
41. Butscher, “An Introduction,” p. 14.
    プラスとヒューズの出会い，およびその後の生活については，拙稿「テッ

ド・ヒューズ――シャーマン詩人の役割」(『慶應義塾大学日吉紀要　英語英米文学』No. 59)，pp. 1–35 参照。

42. Alexander, pp. 205–6.
43. Ronald Hayman, *The Death & Life of Sylvia Plath* (New York: A Birch Lane Press Book, 1991), p. 104.
44. Wagner-Martin, pp. 142–43.
45. Malcolm, p. 53.
46. Stevenson, p. 64.
47. Malcolm, p. 54.
48. Hayman, p. 100.
49. Malcolm, p. 54.
50. Kirk, p. 127.
51. Alexander, p. 332; Kirk, p. 128.
52. Stevenson, p. 137.
53. Steven Gould Axelrod, "The poetry of Sylvia Plath," *The Cambridge Companion to Sylvia Plath*, ed. Jo Gill (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2006; 2007), pp. 79–80.
54. Diane Middlebrook, "The poetry of Sylvia Plath and Ted Hughes: call and response," *The Cambridge Companion to Sylvia Plath*, p. 161.
55. シルヴィアは，1953 年 1 月スキーで腓骨（fibula）を骨折し，松葉杖（crutches）を必要としたことがあった。また，1961 年 3 月，虫垂炎の手術（appendectomy）を受けた。
56. Hayman, pp. 184–85.
57. David Holbrook, *Sylvia Plath: Poetry and Existence* (London: The Athlone Press, 1976; 1991), p. 255.
58. Gill, *The Cambridge Introduction to Sylvia Plath*, p. 59.
59. M. L. Rosenthal, "Sylvia Plath and confessional poetry," *The Art of Sylvia Plath*, ed.,Charles Newman (1970; Bloomington: Indiana Univ. Press,1971), p. 71.
60. Hayman, p. 193.
61. Middlebrook, p. 168.
62. Wagner-Martin, p. 240.
63. Judith Kroll, *Chapters in a Mythology: The Poetry of Sylvia Plath* (New York: Harper & Row, 1976), p. 3; p. 6.
64. Quoting from Helen Vendler, *Coming of Age as a Poet*, pp. 141–42.
65. ibid., p. 144.
66. loc. cit.

67. Butscher, “An Introduction,” pp. 12–19.
68. Quoting from Holbrook, p. 279.
69. ibid. p. 280.
70. ibid. p. 130.
71. loc.cit.

† 注に挙げたもの以外に，下記の文献を参照した。

Hughes, Ted, ed., *The Collected Poems: Sylvia Plath* (New York: Harper Perennial, 1960; 1981). 作品からの引用は，このテクストに拠る。和訳は先行訳を参照し，拙訳を試みた。
Plath, Sylvia, *Ariel* (1961; New York: Harper Perennial, 1999).
————, The Bell Jar (1963; New York: Harper Perennial, 2005).

皆見　昭訳『シルヴィア・プラス詩集』（鷹書房，1976）
水田宗子著『鏡の中の錯乱：シルヴィア・プラス詩選／シルヴィア・プラス——受難の女性詩人』（静地社，1981）
徳永暢三編訳『シルヴィア・プラス詩集』（小沢書店，1993）
吉原幸子・皆見　昭訳『シルヴィア・プラス詩集』（思潮社，1995）

皆見　昭・渥美育子編『シルヴィア・プラスの世界』（南雲堂，1982）
アン・スティーブンソン著（1989），風呂本惇子訳『詩人シルヴィア・プラスの生涯』（晶文社，1994）

Synopsis

Sylvia Plath: Flippancy and Despair

Katsuya Hiromoto

A thirst for literary fame, an obsession with her deceased father, an independent female spirit, self-love, fragile emotions—a reader of Sylvia Plath's work is sure to discern these among other prominent themes. The purpose of this essay is to delve a little further into her life and literary output and thereby reveal the characteristics of her work as well as her poetic sensibility. I will begin with a brief examination of her life, followed by an analysis of seven of her poems.

(1)

Sylvia Plath was born in Boston, Massachusetts, on 27 October 1932. Her father, Otto, a German professor of biology at the University of Boston, was a Polish immigrant, while her mother Aurelia was a first-generation American of Austrian origin. Otto Plath's health began to deteriorate soon after her brother Warren was born in 1935, and his leg had to be amputated due to the worsening of gangrene caused by diabetes. He finally died in 1940, when Plath was 8 years old. The poet felt that her father had deliberately abandoned her by committing a kind of suicide.

In September 1950, Plath entered the prestigious Smith College in Northampton, Massachusetts, on a scholarship, and specialized in English

literature. She was a dedicated student who pushed herself beyond her limits in a competitive atmosphere, regularly attending chapel service, writing short stories and poems, and involving herself in *Smith Review*, a student magazine. In 1953, after working as a student editor for *Mademoiselle* magazine for one month in New York, she learned that her application to Frank O'Connor's summer creative writing course at Harvard University was rejected. This incident made her lose confidence in herself and drove her to attempt suicide by overdosing on sleeping pills. Three days later, she was found alive in the cellar of her home and transported to Newton-Wellesley Hospital.

Upon recovering from her breakdown, she returned to Smith College in February 1953, and graduated summa cum laude in June 1955 after submitting a thesis called 'The Magic Mirror: A Study of the Double in Two of Dostoevsky's Novels'. She had several fleeting relationships while studying at the college.

In September 1955, she left for England after obtaining a Fulbright scholarship to study at Newnham College of the University of Cambridge. Under the supervision of Kathleen Burton and Dorothea Krook, she read English and attended lectures given by the English faculty. An active participant in students' activities, she met a young poet called Ted Hughes at a party; this meeting resulted in their marriage in June 1956. In the following year, she successfully graduated from Cambridge with an honours degree. Her student life, happy marriage, and its eventual breakdown indicate the vulnerability of America in the context of the clash between European sophistication and American innocence. Her suicide in February 1963 at the age of 30 was a poignant tragedy. Thus, while Plath wore the mask of a positive and pragmatic American girl, she was consumed by deep despair and considered suicide to be her only defence against the world.

(2)

The seven poems I have selected are significant in that they broadly reflect particular aspects of Plath's private life. 'Poems, Potatoes' (1958) was written when she was living in Boston as a happily married woman, and is an attempt to study the boundary of poetry. 'Potatoes' serve as a metaphor for the completed poem written down in verse form. The poem as a potato has solidity as a work of art; at the same time, it has an imaginary dimension that haunts the poet's sensitive consciousness and which she leaves unvoiced.

Plath wrote 'Magi' (1960) on the birth of first child, her daughter Frieda. She feels that her husband indulges himself in a game of abstractions, using his knowledge of astrology and superstitions. To elaborate, her husband regards his baby as being controlled by the dominant star hovering over the bed where she is laid.

The theme of 'The Applicant' (1962) is the restrictive gender roles imposed upon women by men. The narrator is an unscrupulous salesman who poses as a sex therapist. He appeals to a man who wishes to find his ideal marriage partner. However, he presents 'an image' rather than a living creature; what he peddles is a combination of pornography, a sex doll, and a wife dehumanized by her husband.

In order to purify herself of the past, Plath wrote 'Daddy' (1962), a poem about her relationships with her father. In the first stanza, the poet addresses her late father in an infant's voice. Indicative of the shape of the bay of Cape Cod, the 'black shoe' in the poem goes on to symbolize her father, her husband, cruel fascists, and men in general. 'Daddy' is a controversial poem in that the poet describes the bitterness of her own feelings in terms of the racial persecution and atrocities suffered by the Jews. One can surmise, however, that it was Plath's intention to provoke a dialogue

between her and readers who may feel that the poet is exaggerating her suffering in comparing it to that of the Jews.

'Nick and the Candlestick' (1962), comprising 14 stanzas, reveals the poet's feelings about a night on which she suffers a bout of insomnia. She wakes up in the middle of the night, disturbed by a surreal nightmare. Following the birth of her son, Nick, a pivotal change occurs after the succession of unpleasant scenes, culminating in the image of a stable home with a distinctively Victorian atmosphere.

In 'Lady Lazarus' (1962) the narrator states that she is resurrected after committing suicide once every ten years, like Lazarus who is raised from the dead in the New Testament. She performs theatrical scenes of her revival in broad daylight for the benefit of voyeuristic readers. Like a phoenix, she is reborn and revenges herself on men. The most striking feature of the poem is its combination of flippancy and despair, which can be described as the double nature of her state of mind, and which is characteristic of her literature as well as her attitude toward life.

'The Edge' (1963) is considered to be the last poem Plath penned about one week before her death. Condemned for glorifying suicide, it is a literary work of art which exhibits the poet's insight into human nature. In 'Wintering', another poem written about four months before 'The Edge', the narrator experiences a blossoming, although her fertile body, which is capable of bringing forth new life, struggles against winter. In striking contrast to the theme of 'Wintering', 'The Edge' depicts a poet who abandons herself to a sense of passivity, drawing comfort from her accomplishments as a professional writer.

(3)

An examination of the poems Plath crafted clearly suggests that they

reflect the events and circumstances of her life. The most striking aspect of her poetic world is that it is closely concerned with her personal preoccupations, which she embellishes with references to history, mythology, and literature. Her irreconcilable self creates a division between the individual and society, which may lead one to regard her as a descendant of the Romantic poets. However, it is worth noting that Plath does not sympathize with readers, and instead provokes them. As a high achiever, she is unable to tolerate failures, whereas the Romantic poets were sympathetic toward the weak, oppressed, and rebellious. Also, she is not concerned with social reform, but intends to turn readers' attention to her own problems while situating them in a cultural context.

In summary, Plath can be described as a confessional poet who has succeeded in composing poems that serve as an inspiration to people who are interested in the gender roles of women, critiques of maleness, and human psychology.